レイモンド・カーヴァー『大聖堂』に関する一考察

菊池　せつ子

A study of *Cathedral* by Raymond Carver

Setsuko KIKUCHI

Abstract

The theme of *Cathedral*, the best collection of Raymond Carver's short stories will be studied, especially focusing on "Cathedral", "Feathers", "Preservation", "Vitamins", and "chef's House"

Carver described "Cathedral," the first story that he wrote after *What We Talk About When We Talk About Love* and acknowledged a change in his fiction, which he correlated with the circumstances of his life, getting sober, and feeling more hope with Tess Gallagher, his best partner. Carver's stable life in the late 1970 s and 1980 s influenced his works.

Interaction is essential to the characters. "Cathedral," Carver's most famous story returns to this formula with extraordinary success, offering characters of a gregarious blind man, Robert and a sarcastic, unnamed narrator in this story that results in true liberation through the spiritual eye.

With Robert's hand over the narrator begins to draw the cathedral, the collaborative act representing a higher level of communication. Through this connection, the drawn cathedral begins to assume symbolic significance for the narrator's mind. In the end, temporarily deprived of sight when he closes his eyes, the cynical narrator symbolically becomes part of a larger community dignified by its association with the venerable.

In "Feathers", most of the story depicts Jack and Fran, their evening with Bud and Olla who lead an odd but happy life, which seems old-fashioned for the former couple and is disappearing in American modern times. However, the loving nature of Bud and Olla's home, which has an ugly baby and a grotesque peacock, finally affects Jack and Fran and their relationship deteriorates to where silence and isolation dominate.

In "Preservation," "Chef's House" and "Vitamins" as well, Carver describes some couples in painful relationships or after a breakup has shattered their happy lives, that is, a collapsing family. In Carver's style, he describes *Cathedral* stories in his late writing times, as fuller, stronger, more hopeful than his earlier stories, yet the relationship in the married couples deteriorates, and they suffer dissociation, alienation and isolation.

Key words : The Spiritual Eye, The Disappearing Image of a Happy American Couple,
A Change, Isolation, A Collapsing Family
キーワード：心の眼、消え行く幸福なアメリカの夫婦像、変化、孤立、崩壊する家庭

はじめに

この短編集『大聖堂』(*Cathedral*)は1983年の9月15日にクノップフ社から出版された。レイモンド・カーヴァーの短編集としては『お静かに願います』(*Will You Be Quiet, Please*?)『愛について語るときに我々の語ること』(*What We Talk About When We Talk About Love*)に続く三冊目ということになる。本書は全米批評家サークル賞とピュリッツァー賞にノミネートされ、表題作「大聖堂」は1982年度の『ベスト・アメリカン・ショート・ストーリーズ』に掲載された。

創作の気力と文章的技術、さらにこの作家独自の持ち味が、最高のレベルでぴたっと重ね合わされ、まさに知・情・意の三拍子が揃った見事な出来となっている。彼の前期の著作時代の短編にも、後期の作品に劣らず素晴らしいものは数多くある。しかし、カーヴァーはこの短編集『大聖堂』で——もちろん出来不出来の差は作品によって多少はあるものの——成熟期に入った一流作家としての風格さえ見せている。長年に亘って彼の人生を狂わせてきたアルコール依存症も克服し、前妻との離婚も成立させて、彼の良き理解者であるテス・ギャラガーとの新しい生活が軌道に乗りかけていた時だけに、以前に比べると作品の質も作風も安定し、一作一作の語数がそれまでのものに比べてずっと増加し、さらに円熟味を深めている。

「ぽんと放り出してそれでおしまい」的なシュールな感じが薄れ、登場人物に対する温かくやさしい視線が強く感じられるようになっている。それにつれて作品にも深みと説得力が増し、人々を覆うどうしようもない悲しみと心の暗黒、その雲間から瞬間的にさっと差し込む陽光のごとき「救い」、そしてそれを再び阻もうとする悲劇、それらの宿命的な対比の描き方も実に見事である。

彼の前期の短編集『お静かに願います』に比べると多くの批評家が述べているように、後期に書かれたこの短編集から受ける印象は「明るい」、もしくは「寛大」ということになる。しかし、作品がまったく様変わりしたというわけではなく、題材・背景として飲酒・アルコール依存症、結婚生活の破綻など、カーヴァーの作品でしばしば見られる悲劇的なものが扱われているものが大部分であり、十二編中九編を数えている。

アルコール依存症ものにはカーヴァー自身も入院していたアルコール依存症の回復センターを舞台にした「僕が電話をかけている場所 "Where I'm Calling From"」が挙げられるし、また「轡 "The Bridle"」にしても、酒を飲んだ勢いで自ら招いた夫の怪我が引き金となって一家族の悲劇が生まれている。また、失業して生きる意欲そのものを喪失してしまった夫、その夫を見ながら、自分もまたどうすれば良いのか途方にくれる妻など、夫婦関係の崩壊する様が描かれており、いずれも鋭く複雑な心理劇となっている。この短編集の中から表題作「大聖堂」、「羽根 "Feathers"」、「シェフの家 "Chef's House"」、「保存されたもの"Preservation"」,「ビタミン "Vitamins"」に焦点を当て、円熟期のカーヴァーが追い求めたテーマを考察する。

心の眼

1981年の4月に大手クノップフ社から出た『愛について語るときに我々が語ること』の原稿を手放してから、カーヴァーはほぼ半年間何も書かなかったという。そして、最初に書いたのが『アトランティック・マンスリー』誌1981年9月号に載った「大聖堂」というこの短編集の表題作だった。これは誰もが認めるように、以前のカーヴァーとはまったく違って、小説の緊迫感よりはやさしい味わいを重視した作品となっている。アメリカの小説家としては大御所的存在のアーヴィング・ハウは「より大きなスコープとより繊細なニュアンスに向けて奮闘した」と言い、そうしたカーヴァーの変化に作家としての成長を読み取っている。「この短編集は、小説の世界の枠をぐっと押し広げたカーヴァーの喜びと自信が満ち溢れている。新しい

地平に足を踏み入れたカーヴァーの興奮のようなものがこちらにひしひしと伝わってくる」と。

この短編は、前作『愛について語るときに我々が語ること』で突き止められた「省略の美学」から自らを解放することに一役買っただけでなく、自己の過ちを贖罪するような作品を次々と生み出す出発点となった。「この作品は単に書き方の変化だけじゃなく生活の変化を反映しているのかもしれない.....この短編を書いた時、目の前がぱっと開けたのです。私はそれまで作品の骨というより、骨の髄まで削り取りながら、別の道を可能な限り究めていたんです。その道はどう進んでも行き止まりがあるだけでした」とはカーヴァー自身の言葉である。

この作品「大聖堂」は実際、小説の中で何らかの人間的な過ちが救われる短編となっている。タイトルに暗示されるように、この小説の中にカーヴァーの「カトリック的改宗」の始まりを読み取る批評家もいる。それはともかく、これ以降カーヴァーは堰を切ったように、こうした地獄の中で一点の光を見るような「小さな救い」の瞬間なり、あるいは醜いものやおぞましい物に対する、主人公の価値観なり偏見が改められるような「啓示」の瞬間を尊ぶ物語をとつとつと語り始める。例えばこの短編集の中で「羽根」、「僕が電話をかけている場所」、「轡」などがそれに該当する。

「大聖堂」の書き出しは、この物語の語り手の妻の友人である盲人ロバートが、家に泊まりに来ることになり、心から盲人を歓迎できない夫の複雑な心情を巧みに描いてみせている。

He was no one I knew. And his being blind bothered me. My idea of blindness came from the movies. In the movies, the blind moved slowly and never laughed. Sometimes they were led by seeing-eye dogs. A blind man in my house was not something I looked forward to. [1)]

「私にとっては会ったこともない相手である。それに目が見えないというのもうっとしかった。私の盲人に対する認識というのは大体が映画から得たものなのだが、映画に出てくる盲人には動作がのろくて決して笑わないし、時には盲導犬に連れられている。私の家にそんな盲人が来るなんて、なんだかぞっとしない。」（村上春樹訳、これ以降特記なき限りは村上訳）こういう憂鬱な気分の夫の気持ちとは対照的に、妻は盲人と長年テープでやり取りをし、何でも包み隠さず話している間柄の二人は、彼を駅まで車で迎えに行き上機嫌で彼女は帰ってくる。

夫は愛する妻の手前、表面上盲人をなんとか歓待しようとするが、盲人には答えられないような、無神経と思われる質問を連発し、彼の思惑はことごとく裏目に出て、妻に眉をひそめられる結果となってしまう。それでも妻が食事の後疲れてしばらく眠ってしまった時、テレビを流しながら居間で、盲人に水割りを作ってやったり、興味を示したので大麻の吸引の初体験をさせたりと、精一杯夫なりに彼をもてなす努力をし、ひと時盲人と二人だけの時間を過ごす。

夫はテレビで放映していた番組で大聖堂が映し出された時に、再びうっかりして、その盲人に大聖堂とはどんなものか分かるかどうかといった愚問を発してしまう。そのような意地悪な質問をしたことを夫が詫びると、盲人は気にする様子もなく、冷静に一つのことを提案する。絵を描く夫の手の上に盲人の手をのせて、その動きによって理解するというのだ。そして夫は言われたとおりに眼を閉じて描き続ける。

The blind man got down from the sofa and sat next to me on the carpet. He ran his fingers over the paper. The edges, even the edges. He fingered the corners. “All right,” he said. “all right, let’s do her.” He found my hand, the hand with the pen. He closed his hand over my hand. [2)]

「盲人はソファーから降り、カーペットの私の隣に腰を下ろした。彼は紙の上に指をのせた。紙の両脇をなぞり、へりと上下を確認した。四隅に指を触れた。『よろしい』と彼は言った。『これでいい。描くとしよう』彼はペンを持った方の私の手を探り当て、その上に自分の手をぴた

りと重ねた。」

盲人と同じ体験、同じ立場にいることによって、夫は心の眼で何かを感じ取るのである。

実際に目に映っているために、むしろ邪魔になって物事が見えなくなることがある。あるいは理性的理解が感性的理解を阻んでいるといってもよい。ともかく、心の眼でしか感じ取れないものがある。「大聖堂」で扱われていることはまさにこれなのである。

But I had my eyes closed. I thought I'd keep them that way for a little longer. I thought it was something I ought to do. "Well?" he said. "Are you looking ?" My eyes were still closed. I was in my house. I knew that. But I didn't feel like I was inside anything. "It's really something," I said. [3)]

「しかし私はずっと目を閉じていた。もう少し目を閉じていようと私は思った。それはそうしなくてはいけないことのように思えたのだ.....。私は目を閉じたままだった。私は自分の家にいるわけだし、頭ではそれは分かっていた。しかし自分が何かの内部にいるという感覚がまるでなかった。『確かにこれはすごいや』と私は言った。」こうして、夫は今までの人生で味わったことのない感覚を味わいながら絵を描きあげる。その行為が、盲人が語った「私は今も何かを学び取ろうとしているんだ。学ぶことには終わりってものがないからね」というヒューマニスティックな言葉と共鳴する。「ささやかだけれども、役に立つこと」と「大聖堂」に見られるように、カーヴァーがこの短編集でとった姿勢は、人間の精神の内部を描くヒューマニスティックな「明るい」姿勢なのである。

カーヴァーの場合、それは日々の暮らしに満ち足りているという「現実肯定」ではない。どうにか生活を変えたい、いい暮らしをしたいと常に願っているが、どうにもうまくいかない精神的窒息状態にいながら、それでも毎日を送っていかなければならない、という意味の「現実肯定」である。カーヴァーはそういう人々を書き続けてきたのだ。あるインタヴューで述べているように、「成功したくても成功しない人々の人生は書くことに値する。」と感じ、「最善を尽くすしかない」人々を浮き彫りにしてきたのである。

この短編集『大聖堂』以来、後期の作品の登場人物たちの精神的な深まりは、前期の作品よりは進化している。しかし、難を言えばその深まりがこの短編集の場合、「重さ」となって読者の胸に残ってしまう嫌いがある。それは作品の重量感ではなく、読後の「せつなさ」、「やりきれなさ」に近い。なぜそのような印象を受けるかといえば、カーヴァーが緊張感ある場面ではなく、緊迫下にある人々の心の動きを捉えようとしているために、感情表現が多くなっているせいだと考えられる。カーヴァー的な感情表現を抑えた淡々とした語り口ではなく、登場人物の感情の吐露が目に付き、それが読むものに「重さ」を感じさせる。緊張感のある場面をスナップ・ショットのように捉えていた初期の作品の文体である、客観的な「ハードボイルド・スタイル」は後期の作品では姿を消してしまっている。

消えゆくアメリカの幸福な夫婦像

カーヴァーは短篇の中では何より、夫婦の関係に焦点を当てている作品が多い。この短編集の「羽根 "Feathers"」という作品でも、この作品の語り手となっているジャックとその妻フラン、ジャックの友人のバドとその妻オラという二組の夫婦が関わり合うことによって、それぞれの夫婦の「ずれ」を照らし出す。古き良き時代の理想的なディックとジェーンのような幸せな夫婦像がなかなか見当たらない。そこに描かれるのは家庭の中には必ずある「醜悪なもの」、または「ずれ」である。

この作品は職場の同僚で、郊外の一戸建てに住む友人のバドに招待されたジャックとその妻の、一日の体験を記しただけの短篇作品であると言えばそれだけのことで、なんら大事件が起きているわけでもない。もっともその平々凡々とした日常のささやかな動作の描き方の中に、

カーヴァーの魅力はあるのだから、読み手は代名詞の使い方の微妙な違い、斜字体による小さな強調に注意を払わなければならないし、会話の内容そのものよりも、前後のゼスチャーに気をつけなければならない。

例えば、子供は欲しくないと思っている語り手のジャックは、バドとオラ夫婦の八ヵ月になる赤ん坊をあやしている妻のフランを見ながら、「フランは赤ん坊をじっと見ていた。両手を合わせパチパチ叩きながら歌をうたうと、赤ん坊は喜んでいた。少なくともそれは‘ザ・シング’むずかるのを止めたんだよ」と言う。赤ん坊に興味のない男にとって、それは物でしかない。とはいえこの作品に出てくるハロルドという赤ん坊は、バドとオラという若い両親にとっては宝物なのだが、他人の目には醜悪そのものである。

Bar none, it was the ugliest baby I'd ever seen. It was so ugly I couldn't say anything. No words would come out of my mouth.....It had a big red face, pop eyes, a broad forehead and these big lips. It had no neck to speak of, and it had three or four fat chins. [4)]

「それは誰がなんと言おうと、これまで私が見たうちで一番不細工な赤ん坊だった。あまり醜いので、私は口をきくこともできなかった。一片の言葉も私の口からは出てこなかった。(中略) 顔は赤くて大きく、目はとびだしていて、額はだだっ広く、唇がぶ厚い。首と呼べるほどのものはなく、あごは三重四重顎ときている。」このように赤ん坊が、「醜悪なもの」の象徴として強調され描かれている。

バド夫婦の住む家のあたりは、古き良き時代のアメリカを彷彿とさせるのどかな情景が広がっている。乳牛のいる牧場があり、小さな家々が道路から奥まって建てられている。小鳥が飛び交い、野花が咲き乱れ、家庭菜園があるようなのどかな理想的な環境である。だがそこに住むバド夫婦は、「イノセント」を忘れた語り手ジャックとフラン夫婦から見るといかにも時代遅れの人間であり、陳腐なセンチメンタリズムに動かされているように映る。結婚後、夫のバドに歯列矯正の費用を出してもらったオラは、昔の歯型を保存してテレビの台の上に置き、そうやって日々夫に対する感謝の気持ちを忘れないようにしている。そのことを得意げに他人に説明するオラの純朴さに、ジャックとその妻フランは彼女に違和感を覚えあきれてしまう。さらに、夫を亡くしたオラの実家の母親に仕送りをするバドに対しても、同様の感情を抱いてしまうのである。

オラの父親は樵だったが、16歳のとき百科事典をAからZとまで通読しようと決意し、20歳のときその計画を成し遂げたと、誇らしげに話すオラに、そのような目標を立てた男はどうなったか、アメリカの夢を追求した男は幸せになったのか、とアメリカン・ドリームには懐疑的で、ちょっぴり皮肉屋のフランは問いただす。オラの父親は仲間の樵が切り倒した大木の下敷きになって死んでしまい、「勤勉、目標」を掲げて生きるまじめな人間の報われぬ最期が語られる。さらに、昔ながらのイノセントの化身そのものと思えるバド夫婦——バドの妻に対する愛情、家族思い、オラの夫への感謝——の美しい夫婦のあり方は、ジャックとフランという第三者を前に確認しておかなければ成り立たない。そこにこの夫婦の、現代にはそぐわなくなってしまった哀しさ、滑稽さをカーヴァーは絶妙に描いて見せている。

息子が誕生すると葉巻を配る習慣も、もはや意味を持たなくなっているのに、オラは「男の子です！」という赤いラベルを貼った葉巻を夫に持たせ、職場の同僚に息子の誕生を知らせる。様々な社会の通年を批判的に見るようになった70年代、80年代の夫婦とアメリカの夢の実現をいまだに追い求めている夫婦が嘲笑的に描かれているようでもあり、またお互いに関わり合うことによって、どちら側もが抱えている歪みが映し出されてくる。「子供を持たない」と固く決意する歪み。実際70年代には、犬を買う若夫婦や共同生活者が増え、子供に対して責任がもてないからと、子供を作らず犬を可愛がって育

てていた。

しかしジャックの心の中に「ある変化」が起こる。彼はバド夫婦の大地に足をつけたイノセントで、幸せそうな家庭のありように心を打たれて、自分たちも彼らのような家庭を作ろうと一度は決心する。それまで子供は欲しくないと固く誓い合っていた、ジャックの妻フランが妊娠し子供を生む。しかし、この夫婦のその後の人生がはかばかしいものではないことが、この作品の終章で描かれる。

Later, after things had changed for us, and the kid had come along, all of that, Fran would look back on that evening at Bud's place as the beginning of the change. But she's wrong. The change came later—and when it came, it was like something that happened to other people, not something that could have happened to us.....Fran doesn't work at the creamery, and she cut her hair a long time ago. She's gotten fat on me, too. We don't talk about it. What's to say ?[5)]

「その後、状況が変化したり子供が生まれたり何やかやがあった後で、フランはバドの家の出来事を思い返しては『あれが物事の変わり目だったわね』と言うようになった。でもそれは違う。変わったのはその後のことだ。その変化は本当に自分の身に起こったとはなかなか思えなくて、まるで他人の身に振りかかったかの様にしか思えなかった。(中略) フランはもう乳製品工場では働いてはいないし、長い髪もとっくの昔に切ってしまった。それに彼女はぶくぶくと太ってしまった。われわれはそれについてはもう語り合わない。いまさらどう言えばいいのだ。」

「羽根」という作品は、「醜悪なもの」の認識以前と認識以後のずれを描いている。「楽園の鳥」とオラの呼ぶ孔雀の羽根は美しく、フランはその羽根を土産にもらうが孔雀の羽根はまるで魔法の杖でもあったのかのように、フランは妊娠し子供を生む。それまで子供は欲しくないと固く誓い合っていた夫婦に、孔雀の羽根は大きな変化をもたらしてしまったのである。バドとオラの家での衝撃的な一夜から変化は始まったとフランは考えているが、ジャックはそう考えない。「変化はずっと後にやってきた——そして変わり始めてからもそれは他人に起きていることであって、まさか自分達に起きたのだとはとても信じられなかった」と話すジャックの声は、好むと好まざるとに関わらずいつの間にか生活にじわじわと入り込み、人生を変えてしまう「浸食作用」として起こりえる、人生の苛酷さを吐露しているようである。

アメリカは自信を喪失し慌てふためいている姿を世界の人々に見せてしまい、「美しいアメリカの家庭」は映像の彼方に消えていってしまった。結婚という制度そのものの問い直しが行われたのだった。夫婦とは何か、という問いかけは、日本よりもアメリカにおいて特別強い意味合いを帯びてくると思われる。日本でも働く女性たちは増えている。それでもまだ家族という他者を養うという点では、日本の場合当たり前のように、男にその責任があるという姿勢は強い。ところがカーヴァーの描くアメリカの夫婦達には、もはや男が女を養う固定観念にとらわれていない人が多い。だからといって新しい夫婦の理想的なあり方を獲得しているのでもない。現代アメリカの流動的な夫婦像をカーヴァーは描いて見せるのである。

崩壊する家庭

「シェフの家 "Chef's House"」はカーヴァーの作品によく登場するアルコール依存症ものの一つである。主人公のアルコール依存症の夫のせいで家庭が崩壊し、別居状態にある妻。もう一度だけやり直したいという夫の誘いを退けることができず、妻は新しい恋人を捨てて彼の元に向かう。そして'シェフという友人の家'を借りて、ひと夏を彼とともに過ごす。そこには希望に満ちた新しい生活の予感がある。しかしある日、家主のシェフがやって来て、船の遭難で夫を亡くした彼の娘とその子供を住まわせたいので、彼らに出て行ってくれと言う。そのよ

うにして彼らは掴みかけた幸せという幻影を、最後の希望の地と共に追われることになり、しみじみと人生の厳しさを実感する。

友人のシェフも彼らを追い出したくて追い出すわけではない。彼には彼のどうしようもない理由ができ、誰もがみんなを傷つけたくないと思いながらも、結局はそうせざるを得ない立場に追い込まれてしまうという、淡々とした暗い宿命観がこの作品の底に流れている。最後の何行かに漂う絶望感は、まさにカーヴァーならではのものである。

「ビタミン "Vitamins"」という作品では、主婦であることに飽き足らずビタミン剤の家庭訪問販売に打ち込む妻と、病院の雑用係をやりながら酒ばかり飲んでいる夫（カーヴァーは一時期、実際病院の雑用係をやっていたようである）が登場する。ビタミン・ビジネスははじめのうちは順調なのだが、そのうちにだんだん下り坂になってくる。どういうわけか急にビタミン剤が売れなくなったのだ。主人公の夫は、それに呼応するように軋み始める夫婦関係に特に危機感を抱くでもなく、妻の仕事仲間の女性に手を出して気晴らしをしようとする。一夜の気晴らし、それが彼らの求めたものだった。しかし、ジャズ・バーで偶然同席したヴェトナム帰りの黒人にその偽善性を暴力的に告発され、結局すべてを失ってしまう羽目になる。

さらに「保存されたもの "Preservation"」という作品は、夫婦の大切なものが失われ、崩壊する様が巧みに取り扱われている。女が外で働きやすくなった条件に、今日の文明の発展がある。家庭の中の電化もその一つだが、冷凍食品の発達もかなり大きな比重を持って家事労働の減少を促し、当然冷蔵庫はなくてはならないものの一つとなっている。失業して三ヶ月になる夫と、家計を支えるべく仕事をしている妻が主人公のこの短編では、冷蔵庫が故障し冷凍食品は解凍されてしまい、ヨーグルトは腐って悪臭を放っているというのに、朝から晩まで居間のソファに寝そべっていて、気がつかぬ夫に対する妻の苛立ちがカーヴァーらしい文章で淡々と描かれている。

Her husband's bare feet stuck out from one end of the sofa, she could see the crown of his head. He didn't stir. He may or may not have been asleep, and he may or my not have heard her come in. But she decided it didn't make any difference one way or the other. She put her purse on the table and went over to the fridge to get herself some yogurt. But when she opened the door, warm boxed-in air came out at her. She couldn't believe the mess inside. [6)]

仕事に疲れ遅く帰宅してみると、夫は妻が帰ってきたことにも気づかず居間のソファーで、テレビをつけたまま眠りほおけている。「ソファーの一方の端から夫の裸足が突き出していた。もう一方の端っこからは、アームに載せたクッションを枕にした夫の頭のてっぺんが見えた。彼はぴくりとも動かなかった。眠っているのかもしれないし、眠っていないのかもしれない。彼女が帰宅した音を聞いたのかもしれないし、聞かなかったのかもしれない。別にどっちだっていいわよと、彼女は思った。彼女はハンドバックをテーブルの上に置き、ヨーグルトを食べようと思って冷蔵庫の方に行った。でも扉を開けると、生温かいもわっとこもった空気が彼女の顔にかかった。中は目を覆いたくなるような惨状を呈していた。」

台所から居間を眺めるとソファーの背と両端から飛び出た夫の頭と無防備な裸足、ソファーにへばりついてしまった夫の姿は、生きるのをやめてしまった人間としか見えず、妻は幼い頃に父親と二人で出かけて行った競売の楽しかった売り買いの情景を、現在の惨憺たる自分の境遇に照らして反射的に思い出す様は、彼女の絶望感さらには家庭の崩壊感を深くする効果を増長している。さらに冷凍食品の無残な解凍の描写は、夫の失業により夫婦の間柄の均衡が崩れてしまったことを象徴的に暗示している。「冷凍庫の中のアイスクリームはどろどろに溶けて、それが食べ残しのフィッシュ・ステックやコールスローの上にかかっていた。アイスクリ

ームはスパニッシュ・ライスの中にも入っており、冷蔵庫の底に溜まっていた。何もかもアイスクリームまみれだった。彼女は冷凍室の扉を開けてみた。ひどい臭いが吹き出してきた。それは思わずげえっと吐きたくなるようなおぞましい臭いだった。」このシーンは‘保存されていたもの’、つまりこの夫婦のささやかな幸せが、溶け崩れ去ってしまった象徴的な瞬間でもあったのだ。

それでも妻は働かぬ夫に愛想を尽かしながらも、諦めの混じった感情を抱きつつ気を取り直して、夫に新しい冷蔵庫を買うことを提案するが、優柔不断でしかも失業中の夫は今ひとつ乗り気でない。結局新品は無理なので、競売で中古品を手に入れることにするのだが、新しい品物に頼る現代の豊かな暮らしぶりは、男と女の新しい関係が些細な出来事によって変わりうる、関係の不安定なことを物語っているかのようである。その時妻が思い浮かべるのは、安定していた関わり、父親との思い出であり、家の中の「醜悪なもの」が露呈しなかった時代の暮らしぶりである。

だが、アメリカの夫婦はもう後戻りはできない。いやそれは日本でも同じなのだろうか。安定していた家庭の崩壊。家の中の「醜悪なもの」を隠すことにより成り立っていた偽りの家庭像であったのかもしれないが、私たちは幸せな家族の「ふり」をすることによって落ち着きを得ていた。それが何かのきっかけで歪み、いつの日か増幅し破壊の日がやって来るのは自然の成り行きではあるが、歪みを見ぬふりをして享受していた、つかの間の安定であったとも言える。いつかの団欒はすでに現実ではなくなり、妻も夫も自分たちの場所がはっきりしなくなっている。新しい夫婦の関係から、これまでの安定を獲得する日が来るかどうか。後期のカーヴァーの作品群に表れた夫婦たちを追ってみる時、今日のアメリカ社会における男と女の様々なる「ずれ」が感じられ、彼らの孤独感、喪失感などが浮き彫りになる。

（本文中の作品の頁数は Raymond Carver, *Cathedral*, Vintage Contemporaries・Vintage Books , A Division of Random House, Inc.・New York, 1889のものである。）

註

1) “Cathedral”, 209頁
2) 同上, 227頁
3) 同上, 228頁
4) “Feathers”, 22頁
5) 同上, 25～26頁
6) “Presavation”, 39頁

〈参考書〉

1) 『ユリイカ』—変貌するアメリカ文学—、青土社、1987

〈作品〉

1) Carver, Raymond. *Cathedral*, Vintage Contemporaries・Vintage Books. A Division of Random House. Inc.・New York, 1989
2) Raymond Caver. *Fires*, Vintage Contemporaries・Vintage Books, A Division of Random House, Inc.・New York, 1989,
3) 『大聖堂』レイモンド・カーヴァー著、村上春樹訳、中央公論社、1990

〈研究書〉

1) Bethea, Arthur F. *Technique and Sensibility in the Fiction and Poetry of Raymond Carver*, Routledge, 2001